

〈巻頭言〉

## 原稿は1ヵ月机の中へ

青木 健

『成城英文学』29号が上梓された。投稿者4名のうち3名が現役院生である。前号に引き続いて院生の活発な研究活動を物語っており、心強い限りである。もちろん牧島秀之さんが範を垂れたように先輩諸氏の投稿大歓迎である。職に就いている場合、煩瑣な仕事と論文執筆は両立し難いもの。その点自由な時間がより多くある現役院生は、チャレンジ精神を発揮して是非積極的に投稿を試みて欲しい。最初から完成度の高い論文が書ければよいが、なかなか思うように行かないもの。しかし、院生をはじめ若い人には若さ故の弱さがある一方で、若さ故の強さがあり、自由な発想が期待できる。院生同士の忌憚ない意見の交換も若さの特権。そういう中で互いに切磋琢磨できる環境が生み出されるとさらによいのだが。

幸い『成城英文学』の出版費用の支払は大学が責任をもってくれるとのこと。経済的負担が省かれるのは院生にとって朗報にちがいない。かつて我々も院生の頃研究雑誌発刊を試みたことがある。当時の大学は院生の同人誌発刊の費用まで面倒見てくれなかったから、我々院生が中心になって「身銭を切って」研究同人誌を出すことにした。貧乏学生にとり経済的な負担が重かった反面、自由な発想のもとで思い切り羽を伸ばすことができた。同人誌は『アレオパガス』(Areopagus)と命名された。これは、もともと最高法廷のあったアテネの丘を指すが、後にJ. ミルトンは、この名に因んで彼の散文の最高傑作といわれる『アレオパジティカ』(Areopagitica, 1644)という論文を書き当時制定された出版物検閲法を弾劾している。気宇壮大な名にあやかり、同人諸氏は各自のテーマに従ってのびのびと書いた。多分8号ほど続いたと思う。その時のスタイルを維持している人、がらり変わった人といろいろだが、今はそれぞれの大学・学会で活躍中である。

院生が中心の同人誌とはいえ、先生方もいろいろアドバイスをくださ

った。研究者の心得として一つの小さなテーマを生涯に渡って追い求めること。前置詞 'of' を研究テーマとしたなら、毎日「オヴ・オブ」と言っ  
て他のことは一切無視する。これを永年続ければ君は 'of' について世界的  
の権威者になれるというのがあった。そんな夢のような話ではなく、もっ  
と現実的なアドバイスを我々は求めていた。その中に「原稿を書いたら 1  
ヵ月間放っておくとよい」というのがあった。これはひょっとして実行可  
能かなと思った。しかし、せっかく苦心して書いた論文を机の中に 1 ヶ  
月も放りっぱなしにしておいてよいのか。何のために？ その効果は？  
いろいろ考えたが適当な解答は得られずじまいだった。数年後いろいろな  
意味で余裕ができた頃、ふと思い出してアドバイスを実行してみた。1 ヶ  
月後あらためて自分が書いた文章を読んでみた。驚いたことに自分の文章  
がまるで第三者が書いたような印象なのだ。やたらミスがあるのには閉口  
したが、それよりも 1 ヶ月経って自分の思考回路が変わったのではと思  
えるほど、テーマへの関心の浅さ、論展開の仕方の幼稚さが目についた。  
全体を見直したことは言うまでもない。教師のアドバイスの意味は、第三  
者の目になって自分の論文を読むこと、それにはある程度の時間的余裕が  
必要なのだということらしかった。これを実行するには、一気に長い論文  
を仕上げるのではなく、常にテーマへの問題意識を持ち、少しずつ書き溜  
めることが肝心のようなのである。修士論文を前にしている院生には是非実行  
して欲しいと思うがどうだろうか。